

## 15年目を迎え、 盛大にIT百撰事業を計画 6月22日にキックオフ

4月27日

今年で15年目を迎える関西IT百撰表彰事業が6月22日、キックオフする。事務局機能を担当する特定非営利活動法人IT百撰アドバイザー・クラブは4月27日総会を開いて、今年度の活動スケジュールを決めた。

この事業は、関西における中小企業のIT化を促進するため、模範となる優秀事例を顕彰しているもので、総会で山岡喜昭理事長ほかを再選、今年度の事業計画を審議した。

今年度の事業日程は、関西IT百撰キックオフ会議を6月22日に開いて募集、選考を担当する撰者のIT専門家、32名が一斉に活動を開始、広く関西各地から寄せられる自薦、他薦の応募企業を審査員で審査、12月7日に撰者会議を開いて優秀企業、最優秀企業を決定する。そして、来年3月7日、大阪国際会議場で入賞企業の表彰式と事例報告会を開く。今年度は15周年に当たるため、特別記念講演として、ロックフィールドの岩田弘三会長から、創業の着眼点や苦勞話を聞く予定。一方、支援機関の関西IT百撰の会は今年度、たねや、アートコーポレーショ

ンなど、116社が協賛している。

前年度は、3月9日に最優秀賞に大洋製器工業（大阪市西区、岡室富夫社長）、優秀賞に松元サービス（東大阪市、松元信昭社長）ほか7社を顕彰、秋山喜久 サイエンス・フォーラム会長から表彰状とトロフィを贈った。応募者数は前年度比30%多い75事例の応募があり、ITによる経営改善、新事業創生が盛んになっていることがうかがえた。そのため、今年度は大阪商工会議所の後援を得て、15年目にふさわしい事業を実施することになっている。

この事業は関西サイエンス・フォーラムが2009年、関西経済連合会から引き継いで実施しており、今年度は7年目、通算で15年目となる。山岡理事長は「15年目の節目を迎え、広く関西の中小企業からITで好業績を挙げている企業を発掘し、他社の模範として事業革新を促進したい。最優秀を目指して切磋琢磨してほしい」としている。



アドバイザー・クラブの総会風景

## 第37回異分野交流懇話会 「日本的経営のあすを考える」 加護野教授が熱弁

5月8日

関西サイエンス・フォーラムは5月8日、リーガロイヤルNCBで、第37回異分野交流懇話会の講演会を開いた。テーマは「日本的経営のあすを考える」で、加護野忠男甲南大学特別客員教授が講演と討論の進行役を務めた。立ち直りを見せつつある日本産業が流動化する世界で競争力を回復するためには、日本的経営のよさを活かしていくことが望まれることから企画された。新野幸次郎元神戸大学長も参加し、熱心に意見を述べ合った。

加護野教授は「日本的経営の特徴と進化、コーポレートガバナンス30」のテーマでコーポレートガバナンス1.0から2.0、3.0へ変わる過程で日本的経営がたどった功罪を挙げた。そして日本では長期株主が特徴の一つで、ファミリービジネスが好業績で長寿である理由を解説。一方で税制改革、ファンドの評価基準などが障害となると指摘した。

前川洋一郎 大阪商業大学大学院非常勤講師は近著「なぜあの会社は100年も繁盛しているのか」のデータをもとに日本的経営のポイントを説明した。最初に「老舗」の定義を100年以上、もうけより世間、地元の評判、信

用が何より大事」と特徴を挙げて解説、日本型経営は欧米と違って老舗経営のスタイルを引きずっているとした。昨今の事業継承環境の中で、老舗がとってきたトップと番頭、女将の相互補完に日本的経営の特徴があると分析した。

討論に入ると、経営者の立場から伊藤浩 ペタビット社長がICT時代のリーテル経営にしぼって若者の生き方の変化と創業15年目で行っているユニット制の組織改革について紹介した。また、渡辺良機 東海パネ工業社長はものづくり企業のあるべき姿を実践している経営を説明し、「経営は社員のしあわせづくり」と述べた。加護野教授が舵取りしながら、楽しく日本的経営を語り合った。

最後に新野元学長が所感を述べた。「今、BRICS各国も苦難の道を歩んでおり、どういう形で経済の仕組みをつくっていけばよいか共通の悩み」と前置きし、「伊藤さんの改革は近未来の経営になるのかもしれないし、いずれにしても変化する状況に対応するためにこういう形が考えられると理解できる」と締めくくった。



左から、加護野教授、前川講師、渡辺社長、伊藤社長